

大きらいな牛乳を大すきな牛乳に

— 教師の配慮と学級集団の活用 —

山前小学校教諭 吉田富守

5月の下旬のことであった。子どもの日に因み特別献立ての給食とあって、朝から子どもたちの顔がほころぶ。給食の時間となり配食がはじまると、いつも腕白で手をやく男の子もきょうばかりはおとなしく席についている。配食がすみ当番の合図で「いただきます。」の声もいつもよりはずんできこえる。食事がはじまる。グループで仲よく語り合いながら食事をしている子どもたちのようにしばらく見入ってしまう。好きな食べものから食べていく子。大事そうに大好きな食べものはあつまわしにしてゆっくり楽しみながら食べていく子。そんな子どもたちにまじって肉が食べられない子や野菜が食べられず食器の中をスプーンでかきまわし教師の顔色をうかがうようにおそるおそるスプーンを口に運ぶ子。そこにはさまざまな子どもたちの姿がある。

はて、A君は……と見ると驚いた。あれ程「牛乳ぎらい」で困り抜いて来たのに、机の上にはかになつた牛乳びんがのっている。これまでのA君は牛乳を口に含んだだけでも、朝食べて来たものまで吐してしまうという状態だった。A君はまじめな子で、教師の目を盗んでこっそりすてたり、友だちに飲んでもらったりできるような子どもではない。それだけに牛乳の飲めないことに対しての気持ちはさぞつらいものがあつたであろう。そのA君が牛乳を全部飲んでくれたのだ。さっそく声をかけてほめてやろうと思った。しかし、きょうはA君をはじめから観察していたわけではない。きょうできたことならあしたもできるだろうと思ひなおし翌日の給食を待つことにした。

×

×

3年生の時のA君を担当してからというもの「牛乳を飲ませること」に関してはいろいろ手を変え品を変えて指導を試みた。ある時ははげましたり、叱ったり、飲めるまで泣いても許さないという強い態度に出たこともあつた。一口でもいいからとねばってみてもすべて効果はなかつた。その結果仕方のないこととあきらめてみたり、両親の躰のせいにしてたり、医学的には偏食は特別に問題になることもないのだから無理に飲ませることもないなど、自分の気持ちを合理化してみたりしたこともあつた。しかし、やはり心の奥底ではA君の「牛乳ぎらい」にいつもこだわっている自分であつた。

×

×

そのA君がきのうは牛乳を飲んだのだ。きょうこそはA君が牛乳を飲むところを見とどけてやれと意気込んで給食の時間にのぞんだ。A君に気づかれぬように観察していたが一向に牛乳に手がのびない。今、そのうちにはと思ひ待ち続けた。パンやおかずが食べ終る頃になつてもまだ飲むようすがない。とうとうしびれをきらし、「A君、牛乳はどうした飲んでみる。」と声をかけてしまった。子どもたちは口々に「先生無理だよ。A君は1年生の時も、2年生の時も牛乳は飲めなかつたんだよ。飲むとゲロが出ちゃうんだよ。」という。どうしてこの子どもたちの声に気がつかなかつたのだろう。自分さえ一生懸命指導すれば、A君さえ指導すればなおせるのだとばかり思つていた。愚かな自分であ

ったということに気がついた。A君はクラスの子ども全員から「牛乳の飲めない子」というレッテルを貼られ、A君自身も自分が牛乳が飲めないのは当然と信じこんでいたということになぜ気づかなかったのだろうか。クラスの子どもたちの公認がA君の「牛乳ぎらい」に拍車をかけていたのだ。

そこで、きのうA君が牛乳を飲んだことをクラスの子どもたちに話してきかせた。ところがみんなは納得ができないような顔。特別献立して気をとられ、A君が牛乳を飲んだことにはだれも気がつかなかったらしい。そこで、A君にきいてみると、きのうは本当に飲んだという。きのう飲めてきょう飲めない。そんなはずがない。なぜ、きのうは飲めたの だろう。ほかの子が気がつかなかったから飲めたのだろうか。教師をはじめ、ほかの子どもが気にしないところでは、きらいだというものでも飲んだり食べたりできる子どももいるという。はたしてそうなのだろうか。そうとしたら、今までA君のことを気にしすぎたのかもしれない。いや、やっぱり友だちにも気づかれなかったくらいだからこっそり捨てていたのでは……などいろいろな考えが胸を去来した。そして、心の中で期待が大きかっただけに落胆の度合も強かった。

こんなことから、また、教師のいつものくせが出て来る「一口でいいから飲んでごらん。」その結果はやはりはき出すというしまつ。どうしてきのうは飲めたの だろう。……私は本当の所もう投げ出したい気持ちになってしまった。そんな私の気持ちが通じたのか小声で「先生、きのうはコーヒーの粉(ミルメーク)を入れて飲んでみたら飲めたん。」

このとき、今までどうしても牛乳を飲ませることができず、方法もわからないままに来た自分にA君が牛乳が飲めるようになる方法を教えてくれたということを強く感じた。今まで漠然としていた偏食指導のコツみたいなものがわかりかけてきたように思えた。

それは、

- (イ) 牛乳が飲めないでいる子に飲めるようになる方法についてまず、きいてみることである。それは、教師の教えだけで指導するのではなく、その子その子に合った方法を新しく開発しなければならないのではないだろうか。いろいろな文献に書いてあることは、たまたまその子に合った方法だったからよい結果があらわれたのであろう。他人の言っている方法だけでなおそうとすること自体に無理がある。
- (ロ) クラスの子どもたちに「A君は牛乳は飲めない子」という考えを与えてしまったことは失敗であった。A君は今では飲めないがいつかは飲めるようになるという可能性を残しておけるよう指導することが望ましい。
- (ハ) 牛乳を飲めるようにするためには、教師ひとりがおおそうとするのではなく、学級全体の力、飲めない子を暖かく見守り、飲めるようになることを信じてやる思いやり、その子のためなら、どんな協力もするという学級意識を育てることが大切である。

×

×

私は決心した。学級全体、集団という見方から、個人より全体を大切に考える方からはとても許されないことを実行してみようと考えた。

「あした、インスタントコーヒーを学校へ持って来て入れて飲んでよるしい。」ということで家庭にも連絡し、次の日から混入し飲ませてみた。結果は上々であった。

このことは今までにも考えてみなかったことでもないが、他の子どもをうらやましがることを思ったとき、ふみ切る自信がなかった。

しかし、この子を救うことは他の大勢の子どもの気持ちを大切にすることと同じ価値をもっているのだ。A君が甘いコーヒー入りの牛乳を飲んでいれば、他の子どもたちも飲みたいだろう。それは当然のことである。しかし、私は、ここに学級作りの核心を見た。A君への思いやり、A君の立場に立って考える。このような考え方を子どもたちの中に育てる絶好な機会であると感じた。ここにこそ、本当の道徳があり、学級指導があり、学級会活動があるのではないだろうか。脈々として生ききた人間同志としての学級があるのではないだろうか。問題をもつ子を、ただその子だけを直そうという考え方から一歩前進して、困っている子をクラス全体の問題として、みんなで悩み、苦しみ、助け合い励まし合うことこそ本当の児童指導ではなからうか。

私は、自分の組の子どもたちを信じた。そして、理由を話して協力してもらった。不平不満が出てそこに指導があると考えた。そういう私の考えが通じたのか。だれひとり不平をもらす子どもはなかった。

そして、現在では、コーヒーを混ぜることなく、砂糖を入れることなく牛乳をがぶ飲みしているA君の姿を見るにつけ、ひとりの子どもの救うことのすばらしさを感じている。しかし、この矯正には約1年もの長い月日がかかっている。本人の努力はもちろんのこと、級友のA君に対しての暖かい思いやりがあったればこそと級友の協力に心から「ありがとう」といいたい気持ちでいっぱいである。

×

×

たまたま今年は1年生を担当している。家庭でわがままいっぱい育てられた子どもも多く、偏食の矯正では苦労している。牛乳の飲めないという子も2名いる。牛乳そのものではいくら目先きを変えても無理だった。一度嘔吐すると次はもっと飲むことに抵抗を感じ強くこぼむようになる。そこでA君のように、コーヒーなどの添加物を混入することで少しずつではあるが飲めるようになって来ている。2年生までにはなんとか飲めるようにしたいとクラス全員で努力を続けている。そして、そこには、楽しい暖かい思いやりのある学級を育てる夢も合わせ持っているのである。

評

学級担任教師である以上、児童生徒の偏食指導については悩まされた体験があることと思う。この実践記録は「牛乳ぎらいの矯正・指導」を、吉田先生独特の発想によってアプローチし、成功をみた事例である。一見、誰でもできそうな指導であるが、その基本には専門的な行動療法の原理が活用され、系統的脱感作法の理論に立脚しての指導がなされている。特に着目したいことは、今までの偏食指導が応々にして他の先生方が成功した事例を適用し、指導の参考になっているのに対し、本実践では文中にも述べてある通り「牛乳の飲めない子にその飲める方法を聞いてみる」という、その子、その子に適した指導法を開発したところに特色がある。また、学級をあげて、その子を暖かく見守るという協力的体制に学級づくりを指向しているところも特色であり、このことは児童指導の基本である個人に集団を適応させるという考え方にも適合した立派な実践であろう。